

Title	日本におけるロバート・ブラウニングの受容
Author(s)	山本, 昂
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume11, 1997.10 : 147-125
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3194
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日本におけるロバート・ブラウニングの受容

山本 昂

はじめに

ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-89年) のわが国における受容は1875年 (明治8年) に始まり、以後今日までの122年間に、三様の大きな受容形態をとったとみてよいであろう。まず植村正久の受容に代表される〈宗教詩人〉として、ついで二人の京都大学英文学科関係者厨川白村と石田憲次の論争を引き起こした〈人生詩人〉として、そしてさらに、加納秀夫、滝山徳三、大庭千尋等は〈近代詩人〉としてのブラウニングを研究の対象とした。

この小論は、日本におけるブラウニング受容の歴史をたどり、その社会的・学問的な影響関係を明らかにすることを目的とするとともに、ブラウニング研究の最近の傾向と展望についても私見を述べることとする。

I. 宗教詩人として

曾根保氏のみことに緻密な労作「日本におけるロバート・ブラウニング書誌」(1931年)によれば、ブラウニングの名前が講演および講演記録として活字となって初めてわが国に紹介されたのは1875年 (明治8年) のことであった。

(この内容についてはいささか詳しくⅡの項目において触れる予定である。)
その後15年の空白の期間を経て、詩人の名が再びわが国の文献に登場するのは、詩人の死(1889年12月)を契機とする1890年である。「国民之友」は「大詩人ブラウニング死す」と報じ、「女学雑誌」は「英国女権拡張家死す」と伝えている。両誌ともにその発行は1890年2月である。曾根氏の書誌には1890年以後のわずか5年間に、「国民之友」、「女学雑誌」、「日本評論」、「少年文庫」、「日本英学新誌」などブラウニング文献17を数えることができるが、詩人がわが国民に理解され日本の文化に浸透するようになるのは、すべてプロテスタントキリスト教界の指導者植村正久(1858年-1925年)の伝道・文筆活動による。

日本における最初の本格的なブラウニング紹介者としての植村正久についての評価は、笹淵友一氏の著書から二人の英文学者の証言を引用しよう。

植村正久は伝道者としてのみならず、外国文学の紹介者、評論家としてだけでも充分文学史にその名をとどめるに値する業績をのこしている。かれは二十三年三月「日本評論」創刊以来、殆ど毎号に外国文学、たとへばユゴー、トルストイ、ゲーテ、ミルトン、カアライル、バイロン、ワーズワース、ブラウニング等を紹介評論した。齋藤勇博士によれば、植村のトルストイの紹介は恐らく日本におけるトルストイ論の初めであり、ブラウニングといへば直ちに植村を聯想する程であったといひ(福音新報1608号、大正15・6・3)、佐藤清氏もまた「日本においてブラウニングを語り得るものは植村氏ぐらいのものだとされてをった」といっている(福音新報1336号、大正10・2・3)。植村の紹介した文学者の多くがキリスト教的色彩をもっていたことによっても明らかなように、彼の発言はプロテスタンティズムの立場からの理想主義文学の宣伝と写実主義への批判とを趣意とするものであった。¹

植村は「日本評論」、「福音新報」、「宗教及び文芸」等によってその言わんとするところを力説し多くの共鳴者を獲得していった。

植村のブラウニング受容の始まりは、彼が三十二歳であった1890年3月の時点で、「先き頃の諸新聞紙報じて曰く、有名なる英国の詩宗ロベルト・ブラウニング死せりと。余輩其の詩を愛読すること久し。」（「日本評論」）と述べていることから推して1880年代、つまり彼の二十歳代おそらくその中期であったと考えられる。彼のブラウニング理解の深さと正しきは驚嘆に値する。先に引用した文は以下のように続く。

思ふにブラウニングの詩巧緻ならずといへども、皆新率至誠の心より発し、其のインスピレーションは高く天より来る。其の詩「ドラマチック」（演劇）の資に乏しといへども、思想深遠にして能く之を吟味するときは靈魂を導いて至聖所（ホーリ・オブ・ホーリス）に進み入らしむ。蓋しブラウニングは厚く基督教を信奉したる人なり。……其の「靈魂の悲劇」（ソールス・トラゼデー）と題せる詩に左の一句あり。曰く、余は万有を信じ、神を信じ、又我が靈魂を信ずと。其の「パウリン」と云へる詩に曰く、我は上帝を信じ、真理を信じ、愛を信ずるなりと。……ブラウニングまた「パラセルサス」の詩に、己の信ずる処を概括して曰く、「神よ、爾は愛なり、我此の上に吾が信仰を建立す」と。余輩は此ら数句を読み、始めて詩人ロベルト・ブラウニングを知り得べきなり。（1890年3月「日本評論」）²

上田敏（1874年－1916年）による訳詩集「海潮音」（1905年）のなかのブラウニングの詩「春の朝」（時は春／日は朝〔あした〕／朝は七時／片岡に露みちて／……）はカアル・ブッセの〈山のあなた〉とともに、わが国近現代百年にわたって青年の心をとらえて愛唱されてきた詩であるが、ここに訳出されたわずか8行のこの詩は実は1722行からなる劇詩「ピバは通る」のなかで、一人の機織り娘ピバによってうたわれる歌である。彼女の歌声は風に乗ってある大邸宅内の一室に達し、物欲と肉欲に狂った一組の男女が、女の夫を殺してそこからの遁走を企てているとき、二人の耳に天来の声としてひびき、二人は犯した罪

の深さにたじろいでもにみずからの命を断つ契機を与えられる。無心の娘は自分がうたう歌が他者にどのような影響を与えどんな結果を生むかということをもまったく意識することなくそこを〈通り過ぎ (Pippa Passes)〉て行くのである。

植村は、このような劇詩の筋を説明した後、読者に次のようにうたえる。

此のピッパを見よ。……其の無邪気なる歌は、鬼のごとき心をも動かし石の如き靈魂をも溶解し去った。……ピッパの如く天真爛漫、無邪気にして清き靈魂を有って居るならば、世界に非常なる教訓を与え天下に化育を及ぼすことが出来る。

ピッパは朗かなる一と声を遣して忽ち過ぎ去った。実に瞬間時の出来事である。然れ共既に永遠を其内に胚胎した。窮り無き生命が発揮された。「一声はただ有明けの月ばかり」。然れど既に人の心を其の根底から動かして居る。己れの意識し得る効果に眩惑せず、神を信じて大胆に美しき品性を発揮して世に立つことを心懸く可きである。

然れど世界はピッパの過ぐるのみならんや。耶蘇も亦屢吾人を通過せらる。(路加18の37) (〈杜鵑一声ーピッパの歌〉「宗教及び文芸」第1巻5号、1911年〔明治44年〕³)

以上のような筆力をもって植村はブラウニングの詩のなかから特に宗教的色彩の濃いものを紹介宣伝し、ひとりキリスト教界にとどまらず一般有識者の間に広く共鳴者を得た。「植村全集」にはさらに〈詩人ブラウニング〉、〈ブラウニングの詩〉、〈ブラウニングの宗教〉と題する論評が収められている。日本においてブラウニングに対する、最初のしかもきわめて鮮明な像(イメージ)は植村を媒介とし、明治の終期から大正の初期にかけてわが国民の間に形成されたとと言える。それは〈宗教詩人ブラウニング〉というイメージである。植村の跡を継いだと見なされる著作の主要なものには、

1912年 齋藤勇 〈ブラウニングの「復活聖日」〉(「福音新報」)

- 1914年 同上 <カーンシュの書翰> (「神学評論」)
- 1916年 同上 <ブラウニングの詩「ベン・エズラ先生」の思想> (「福音新報」)
- 1920年 同上(訳) 「サウル」(岩波書店)
- 1922年 同上 <個人の内部生活に重きをおける詩人ブラウニングの信仰> (「新小説」春陽堂)
- 1922年 松尾造酒蔵 <ブラウニングの神観(1~5)> (「福音新報」)
- 1922年 畔上賢造 「宗教詩人としてのブラウニング」(警醒社書店)
- 1925年 同上 「ブラウニングの信仰詩」(向山堂書房)

などがある。ここにその名が頻出した齋藤勇自身「私は植村先生の感化でブラウニング熱が熾んになったのであったとおもふ。」⁴と植村の後継者であることを告白している。上記のリストは元号でいうと大正元年に始まり同15年で終わっている。つまり、元号が大正から昭和に改まるとともにブラウニングの詩を宗教の視点からとりあげる論評はすっかり影をひそめたということである。なぜだろうか。

その理由として私は次の二点を挙げたい。一つはブラウニングの名が初めてわが国に活字として伝えられてからすでに大正14年(1925年)で満五十年、その間に植村正久や齋藤勇ら大変有能な牧師、学者、それにブラウニング愛好者によって国民一般のなかに宗教詩人ブラウニングへの理解が広まり、彼の宗教思想に新鮮にして強烈なインパクトを感じなくなったことである。今一つは、第二次大戦を頂点とする世界的緊張や危機感に迫られつつ日々を生きる現代人には、その基調が楽天的であり、その視点はおもっぱら<個人の魂の動き>に向けられていて⁵、いわゆる<社会性>を問題とすることが少なかったブラウニングの詩への共感や詩人との共存意識をもつことが困難になったことである。

このことはもちろんブラウニングの詩の宗教的価値の減少衰退を意味するものではない。一時期の流行が終わってその後は深く静かに彼の宗教詩は読まれ

研究されて今日に至っている。その一つの成果としてはキリスト教の一派「原始福音神の幕屋」の指導者手島郁郎氏の「老いゆけよ、我と共に」(1981年)を挙げるができる。

Ⅱ. 人生詩人として

すでに述べたが、わが国で初めてブラウニングの名が公衆の耳目に触れたのは中村正直(1832年-91年)の演説〈善良なる母を造るの説〉(1875年3月16日)によってでありその月の内に演説を収録して発行された「明六雑誌」を通してであった。詩人の名は以下のような文脈のなかで現れる。

……善キ母ヲ造ランニハ女子ヲ教ルニ如カズ男女ノ教養ハ同等ナルベシニ種アルベカラズ……善徳多クアル中ニソノ最モ主要ナルハ愛ノ徳ナリ詩人ブラウニングの名言ヲ引カン曰ク真正ノ愛ハ智識ヲ卑(ツグナ)フト

〈人生詩人ブラウニング〉の初紹介である。これから24年経って〈両ブラウニングの愛情的書簡〉と題するコラムエッセイが「福音新報」に2回にわたって掲載された。筆者は植村正久、1899年4月と8月のことである。⁶ 1903年4月には内ヶ崎作三郎が「帝国文学」百号記念集において〈ブラウニングの人生観〉を論じ、ついに1918年(大正7年)には帆足理一郎の単行本「人生詩人ブラウニング」が世に出るに至る。帆足はこの書に13篇の〈主として精神的奮闘と憧憬〉の詩を「著者もとより文士にあらず。ただこの大詩人の偉大なる光に触れて、彼を渴仰するの余り、彼の人生詩十数篇を抜萃してわづかにその思想を傳へんと努力せるものに外ならぬ。」との意図をもって訳出した。その〈序〉——人生詩人ブラウニング——は「憧憬の詩人、奮闘の詩人、力の詩人、愛の詩人!」としてブラウニングを紹介している。⁷

……京都の厨川白村は「近代の戀愛観」などで、しきりにブラウニン

グの戀愛詩を紹介した。彼の著書は一般実業家の間に至るまで非常な人気を博するやうになったので、もし日本にブラウニングを普及させた人があるならばそれは白村であろう。

とブラウニング受容の歴史の中の厨川の貢献を認めているのは齋藤勇である。⁸ 厨川白村（1880年－1923年）はすでに明治の最後の年（1912年）に「近代文學十講」を、さらに1920年には「象牙の塔を出て」を出版して知識人の注目を浴びた。両書とも文學的立場からブラウニングの詩と思想とを幅広く紹介している。しかし、何と言っても彼の文名を高からしめたのは「近代の戀愛觀」⁹であった。その一部分は当初大阪朝日新聞に1921年9月18日から20日まで連載されたが、厨川の後輩に当たる同じ京都帝国大學系の石田憲次が読売新聞に論駁の一文を投げ、それが同年10月11日から15日までの5日間にわたって掲載されて、全国的に一般人の中でも賑やかな話題となったという。

「近代の戀愛觀」にみられる厨川の論調がどのようなものであったかをブラウニングの戀愛詩三篇を通して紹介している部分によってみてみよう。

“Love is best” 夏のゆふべ、羅馬の郊外カンパニヤの大野のはて。……蒼然たる暮色に包まれた野も丘も、すべては静かで寂しかった。……おもへばこれが羅馬大帝国都城のあとだ。……ただ一つ、むこうに小さな塔が残っている。……その塔のなかに身を潜め、こよひ男との逢瀬を待ちわびる金髪白面の少女がある。男の来るを今や遅しと胸轟かしながら、息をこらし目を見張って佇んでいる。戀人が来れば、つと歩み寄って二人は忽ち無言にして相抱くであろう。……男と女との戀、そこには今も昔も變りない永遠性があり恒久性がある。……幾世紀間の馬鹿騒ぎ無駄骨折り、その勝利をも光榮をも黄金をも、すべてを皆葬り去れ。戀のみが至上である(Love is best)。……古今東西を通じて男女の性愛には永久不滅の力が動いている。靈と肉との最も強烈な欲求が、ここにのみは長へに美しい詩として長へに花

咲いている。……「永遠の都（イタアナル・シテイ）」は羅馬ではなく、戀である。荒れ果てた古塔のかげに男を待つ女の目にのみは、靈性の永遠不滅の光が輝く。¹⁰

以上の引用文はブラウニングの詩集「男と女」(*Men and Women*)の冒頭を飾った〈廃墟の戀〉(“*Love among the Ruins*”、詩人40歳の時の作)の最終行“*Love is best*”に焦点を合わせた解説文であり、それはまた厨川自身の信念でもあった。

「人生の至上善（サンナム・ボオナム）は何ぞや」、むかしの哲人はかう訊いた。それは人間の永久の疑問であらう。或者は信仰だと答へ、或者は知識だと答へた。……成金に問へばそれは黄金なりと言下に應ふるであらう。八十歳に近かった老詩人ブラウニングは答へた、人生の至上善は一少女の接吻にあると。

SUMMUM BONUM

All the breath and the bloom of the year in the bag of one bee:

.....

Truth that's brighter than gem

Trust that's purer than pearl,—

Brightest truth , purest trust in the universe — all

were for me

In the kiss of one girl. (ll.1, 5~8.)

蜜蜂の囊にみてる一とせの香も花も、……（及ぶべしやは、）

.....

玉よりも輝く眞（まこと）、

珠よりも澄みたる信義、

天地（あめつち）にこよなき眞、澄みわたる一の信義は。

をとめごの清き口づけ。 （上田 敏 訳）

ひととせの花の色香を集めたものは蜜蜂の囊に在る。また大きな鉾山（かなやま）の富は燦として輝く寶玉に、わたつみの陰も光も一個の眞珠の玉に、みな集注せられ凝縮せられている。しかもその寶玉よりも……眞珠よりも、なほたふとき「眞」と「まこと」、それをこの近世の大詩人は、少女の接吻に於て見た。"¹¹

最後にもう一つ極限状況における男女の恋のかたちをブラウニングほどのように描いているか、そしてそれを厨川ほどのように解説し訴えているかをみることにする。

「死のごとく強し」と人は言ふ。しかも戀は更に強くして死をも蹂躪し突破する。戀する人はしばしば「死」を恐れない。

「死」を恐れないと私が言ふのは、単に情死なぞのみを指すのではない。ブラウニングの傑作「ゴンドラの舟中に」を見よ。

青春の熱情に燃ゆる志士は、いま人目をしのぶ女との最後の逢瀬をゴンドラの舟中に身を託す。互に語り互に歌ふふたりの歡樂には、死のかけに刹那を惜しむものの悲壮がある。男を刺すべく今三人の敵が待っているのだ。漕ぎ行く水路の兩岸には寺院や宮殿が聳へて、眼前に人生の虚偽空疎のすがたを見せているが、戀に生きる舟中の人には生の充実がある。やがて男は女を抱いて岸に上らしめると、忽ちにして敵の為に刺される。彼はなほ一たび最後のキスを女に求めて死す。その臨終の言葉

It was ordained to be so, Sweet! — and best

Comes now, beneath thine eyes, upon thy breast,
Still kiss me! Care not for the cowards! Care
Only to put aside thy beauteous hair
My blood will hurt! The Three, I do not scorn
Still kiss me! Care not for the cowards! Care
To death, because they never lived : but I
Have lived indeed, and so—(yet one more kiss)—
can die!

—R. Browning, "In a Gondola."

(大意) かくあるべきは定めなり、戀人よ、—
至上の時は今來たれり、君の目の下に 君が胸の上に。
なほ我にキスを、弱輩を意とせず
君の美しき髪が、わが血に汚れざるやう心せよ。
三人の者どもさげすむにも足らず。かれらは
生きてるにはあらざりき。しかもわれは生きぬ。
さればこそ死するを得。(さらばいま一たびのキスを)。

戀愛の三昧境に於いて人は「死」の恐れに煩はされない。Timor mortis non conturbabant.それは眞に生きたからである。生命の完全燃焼を體驗し得たものにして、はじめて死線を突破し得るのだ。さかしらなる俗物は之を目して戀愛は盲目なりと言ふ。どちらが盲目だか。¹²

以上のような紹介と主張に対して儒教的思想を根底とする旧来の日本の文化と道徳に高い価値を置く人々は大きな不快感をかき立てられたに違いない。そのような人々の代弁者が石田憲次氏(文学博士某と厨川は表現)であった。氏の反駁の骨子はあくまでも家を中心に据えたものであった。曰く

家庭には、少なくともその家としての来歴の古いものには家風があり、家法がある。この家風家法が整頓せられて成文の形を取ったものが即ち家憲である。これら三者は何れも家庭の人々に向って、これが服従を要求する。……

體裁の十分に備はった家族制度の中軸は祖先崇拜である。……家族は祖先崇拜に依って統一せらるる集団である。……凡そ家長権は家長に財産所有権があつて、家族を扶養するところに成立つのである。……¹³

厨川はこの引用文を「読者のお笑ひ草に供する」といい、「【家風】【家法】【家憲】【祖先崇拜】【所有財産】【家長】、なるほどかういふ説教をする色々の人たちから私の戀愛論は攻撃を受けていたのである。」¹⁴と述懐している。1921年（大正10年）10月11日から15日までの5日間、読売新聞紙上で石田憲次が展開した論説〈戀愛の人生に於ける地位—厨川博士を駁す〉の骨子及び結語は以下のようなものであった。

……私は戀愛を人生の大局より見る時、それは結局一つの挿話乃至一つの段階であつて、戀愛を中心に人生を考へる事は、金錢を中心に人生を考へると同様に誤りだと思ふ。……戀愛は常に喜劇の材料と成り時折悲劇の材料と成るが、実人生に於いては、それは多くの災を醸し時としては妖魔の如く、時として悪鬼の如くであるからである。諸君は気が附くであらう。歴史に残る古今の偉人傑士の中、心が狂ふ程戀に熱中した人の無い事を。これは偉大なる気魄と偉大なる事業とは此のよわき感情を妨退する事を證するのである。……私は凡てを對社会的価値から判断し度いと思ふ。個人よりも社会に標準を置いて判断し度いと思ふ。……各人が皆な社会的に目ざめて、社会的に意義有る行動を為してこそ、……享樂的、個人的な戀愛觀の如きは當然廃棄せらるべきものでなければならぬ。……

博士の改革者的熱情とラブ・イズ・ベストの思想とは當然絶縁すべき運命にあると思ふ。博士はその何れを棄てられるであらうか。

白村の長子厨川文夫氏は「近代の戀愛観」の再版（1946年11月）にあたって〈解説〉を付して

父白村が「近代の戀愛観」に於て、あらゆるものを賭して主張し力説したことは要するに「人間」の解放であった。人格を無視し、個人の自由と尊厳とを十重二十重に束縛した封建時代の結婚に関する因襲を寸断し、誤れる道德観を根底から叩き潰し、かくして真に民主主義的な道德観を恋愛と結婚とについて打ち樹てようとしたのであった。青年男女を奴隷化する方式と思想から解放し、自由人として進むべき道を示そうとしたのであった。（父の論が発表され始めると）果然、毀誉褒貶あらゆる批評が囂々と湧き上がった。頑迷な道学先生達が必死となって反撃してきたことは言ふまでもない。……これらの保守主義者は、寝耳に水の新思想の巨砲をぶち込まれて、びっくり仰天、父祖伝来の錆びついた武器を持ち出して応戦これ努めたのであった。¹⁵

と記している。これを一孝行息子の身びいき的な発言と受け取るのは誤っている。現代においても

本書は、秀才の誉れ高い英文学者の著者が恋愛に関する西欧の文献を駆使しながら、封建的家族制度の絆のなかにあった日本の恋愛観を解放し、近代的な人間観に立った新しい恋愛を大胆に主張した書として、日本ヒューマニズム史上大きな意義をもつ評論である。¹⁶

という解説は研究者や識者の間に肯定的に認められている。白村が関東大震災（1923年）後の津波によってその命を失ったことは、わが国の学界・思想界・文学界にとって痛恨極まりないことであった。

〈人生詩人として〉のブラウニングに関する単行本としては次の二点がある。

1918年 帆足理一郎「人生詩人ブラウニング」（洛陽堂）

1976年 福原麟太郎「われとともに老いよーブラウニング随想一」
(新潮社)

後者の帯には〈洗練された碩学のフモール ブラウニングの詩集を開きおもしろくまに綴る……上品な洒落と諧謔 個の内面への深い洞察と活写 英詩聖に托してえがく風雅な“小説的エッセイ”〉との誘いことばが印刷してある。あえて「人生詩人ブラウニング」の項目のなかに入れた。幸福な結末には至らなかった恋愛詩「最後の遠乗り」(“The Last Ride Together”)を紹介する一文を福原氏は「馬竝(な)めて」と題して以下のように締めくくっている。

ブラウニングは、明日のために今日を生きることが正しい、失敗の中に成功がある、とした。夕陽の教えは明日の輝きのためであった。そういう面も恋愛至上の考の中で燃えていないのではなかったことは御存じの通りである。¹⁷

Ⅲ. 近代詩人ブラウニング

近代詩人(ここでは本格派詩人を意味する)としてのブラウニングは、わが国の文芸と英文学研究にいかなる影響を与えたか、また彼の詩の受容の形態とその軌跡はどのようにたどることができるであろうか。

再び齋藤勇博士の「ブラウニング研究」(1948年 洋々書房)の〈緒言〉からの引用によってこの項の論考を始めたい。「ブラウニングを日本に伝へたもう一つの流れは、上田敏の『海潮音』に源を発するであらう。上田博士はペイターを好んだ人である。そしてペイターは当時一青年であったアーサー・シモンズの処女作 *An Introduction to the Study of Browning* (1886年) を激賞した。それで自然、上田博士はブラウニングに親しむ機会が多くなったのかも知れない。」植村正久を論じたおりに指摘したように上田敏といえは「海潮音」で明治・大正期の青年の心を強くとらえた。この訳詩集のなかにブラウニングの

詩は五篇ほど収められており、とくに〈春の朝〉はまれに見る名訳として評判になった。(この詩の初訳は「萬年艸」第3号で1902年12月に発表された。) 薄田泣菫の

かた岡に／日は照りぬ／男木の枝に／鳥うたひ／……

という書き出しの詩〈夏の朝〉には明らかにブラウニングの〈春の朝〉からの影響があると言える。ブラウニングの the hill-side/day's at the morn/
on the thorn/the lark's on the wing を完全な下敷きに行っていることが一読して分かる。「明治最高の名詩集とされる『白羊宮』(明治39年〔1906年〕)の中にあって、同集第一の傑作として評判の高い¹⁸〈ああ大和にしあらましかば〉とブラウニングの“*Oh, to be in England*” (日夏耿之介訳：あはれ英吉利〔いぎりす〕にあらましかば)の一行をもって始まる“*Home—Thoughts, from Abroad*” (1845年)との影響関係については、関良一の「日本近代詩講義」(学燈社 1964年)に詳しい——この詩一篇に関する論考(注釈を含む)だけで関氏は実にA5判28ページを用いている。以下に関係部分を抜粋する。

上田敏は……「近時の作、『大和にしあらましかば』はブラウニングの同じ体に相似し……」と述べている。泣菫自身も「詩集の後に」に

「ああ大和にしあらましかば」は、その当時上田敏氏が云はれま
したやうに、ブラウニングの“*Oh, to be in England*”ではじまる例
の絶唱を想ひ浮べながら生れた作品です。

と、ブラウニングの影響を認めている(関、156ページ)。……いずれにせよ、泣菫は、ゲーテ、シェリイ、キイツ、ブラウニング、……などに示唆を得ながら……道を拓いた第一人者だった(関、168ページ)。

「ブラウニングは、〈劇的独白〉の手法で難解な詩を発表したためか、受容のあとは稀薄と言えよう¹⁹」との指摘は詩の分野に関する限り正しい。しかし、小説の世界においては芥川龍之介(1892年—1927年)という作家の幾つかの代表作に影響を及ぼし、それらの作品をもとに製作された映画「羅生門」(1950

年)が1951年にベネツィア映画祭でグランプリを受賞した。

芥川とブラウニングとの接触の始まりは、彼が22歳のとき、東京帝国大学英文科に入学する一カ月前(1913年8月)に廣瀬雄に宛てて書いた手紙によって知ることができる。

ブラウニングはやめに致し候ぶらうにんぐさいくろびぢあによりて読むつもりに候上田敏氏のすきな「彫像と半身像」は何度かよみかへし候外のよりもやさしい様な気が致し候²⁰

芥川のブラウニング傾斜はついに彼をして「僕は『袈裟と盛遠』式のものを書きためてMen and Womenのやうなものにしたいと思っている計画ばかり色々たてているが一向実行されさうもないこの頃すっかりブラウニング信者になった。」²¹と言わしめる程になった。さらに具体的な彼の作品とブラウニングの詩との関連についても「BrowningのDramatic lyricが小生に影響せるは貴意の通り也。これは報恩記のみならず『藪の中』に於ても試みしものに御座候。」²²と記している。「藪の中」とブラウニングの「指輪と本」との関係については安田保雄氏のすぐれた研究の成果が今日ではすでに学会の通説となっている。

芥川龍之介がこの大作(「指輪と本」)に心引かれたのは、…… Lafcadio Hearnの“Appreciations of Poetry”に拠るものと推定される、この講義集が……編纂され世に送られたのは、1916年すなわち大正5年のことで、龍之介が同書を読んでいたことは、大正8年4月にしたためられた「私の愛読書」(全集第8巻所収)に、

目下特に挙ぐ可き愛読書も無之従ってこの感銘と云ったやうなものも申上げ難けれど、此の一週間ばかりに病床にて読みし小泉八雲氏の *Interpretations of Literature* 二巻及び *Appreciations of Literature* 一巻を近来にない好著と存じ、邦人の英文学に親しまんとするものにとりて絶好の指針たるは元より「怪談」「心」等を愛読するものにとりても、殆ど八雲氏と膝を交へてその卓励風発を耳に

するの概ある所快心極まりなかる可く候。右御答へまで、草々。
とあるに拠って明らかであり、想像をたくましくすれば、龍之介は同書に収められている、'Studies in Browning'中に、きわめて簡単に、しかも興深く Hearn が解説しているのに深く興をそそられて、改めて『指輪と本』を読み、その手法にならって「藪の中」を書き、大正11年1月の『新潮』に発表したのではなかろうか。²³

芥川がブラウニングをどういう観点から受容して行ったかということについては碩学島田謹二が以下のように総括している。

私はイギリス文学全体で、ロバート・ブラウニングこそほんとうに英文学の中心を貫くような靈魂の世界をユニークにとらえ得た大文学者だと信じている。芥川氏は私が六十をこえてからようやくわかったような境地を二十代で直覺的に把握したのだと考えている。……芥川龍之介氏が英文学から学んだものは何かというご質問をうけたといたしますと、お答えするのは、まず第一、詩人ウィリアム・モリス。第二、バーナード・ショウ。第三、英文学だけがもっているユニークなものとして、靈魂や性格の問題をほんとうに強調し、みごとに実現したので、シェイクスピアとブラウニング。—これらから学ぶところが大きかったということです。²⁴

その材源、その視点、さらにはその技法としてブラウニングの影響が明白に跡づけらる芥川作品として以下のものを挙げるができる。²⁵

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-------|
| 1917年 | 「尾形了齋覚え書」 | 「羅生門」 | |
| 1918年 | 「袈裟と盛遠」 | 「枯野抄」 | 「地獄変」 |
| 1919年 | 「開化の良人」 | | |
| 1922年 | 「藪の中」 | | |

なお、ブラウニングの詩がそのオリジナルということはあまり認識されていないが、わが国の少年少女のほとんどが一度は出会う児童文学作品に「ハメ

ルンの笛ふき」がある。1889年版の本と同じくケート・グリーナウェイの挿絵を入れた矢川澄子氏の完訳本（文化出版局刊、1976年第1刷）は、上田敏の再来を思わせるほどのきわめて優れた訳詩の業績である。ラフカディオ・ハーンは東京帝国大学の講師に任ぜられる前の3年間、熊本の第五高等学校の教師であったが、教材としてブラウニングの“The Pied Piper of Hamelin”を学生たちに語り聞かせたという（西成彦〈ラフカディオ・ハーン再考〉、西日本新聞、1992年6月28日）。

本格的な研究面でのブラウニングの伝達と受容は、帝国大学における講義を基にした Lafcadio Hearn の *Appreciations of Poetry* (1916年) と *A History of English Literature* (1927年) によって始められたと考えてよいであろう。ブラウニングの作品そのものが研究の対象となり得る価値をもっていたことの有力な証拠とも考えられるが、東京大学英文学科英語学主任教授が二代にわたってブラウニングに強い関心をもたれたことは注目に値することではないだろうか。市河三喜の学位論文の対象はブラウニングの詩作品であったし、中島文雄には「指輪と本」の一部についての著書がある。東京大学において市河とまったく同時代の英文学の主任教授齋藤勇は1910～1920年代に主として「福音新報」によって〈宗教詩人としてのブラウニング〉を紹介し、その後は、〈近代詩人としてのブラウニング〉に言及することが多かった。〈ブラウニングの詩人観〉は1947年11月に開かれた日本英文学会大会での特別講演（「ブラウニング研究」所収、洋々書房 1948年）であるが、ブラウニングの特質を深くかつ正しくとらえたものである。

宗教家や哲学者ではなくて日本の詩人による「ブラウニング詩集」の出版は1930年、訳と解説をしたのはイギリスでも詩人としてかなりの評価を得ていた野口米次郎である。

特筆すべきは二人の学究によるそれぞれのブラウニング書誌の完成である。市河・齋藤両教授のもとで副手をつとめていた曾根保は1931年に理想社から

「ロバート・ブラウニング」を出した。これは、内外のブラウニング文献を可能な限り網羅した書物で、学界に対する貢献度の大きさは計り知れないものがある。福原麟太郎氏は「日本では曾根保君が聳えて有名なブラウニング学者であった。永い間病床にいられたが去年（1976年）逝去され学界は惜しい才能を失った。御冥福を祈る。」²⁶と述べておられる。ブラウニング研究の本場とも言うべきイギリス、アメリカにおいてさえ、本格的なブラウニング書誌（L. N. Broughton: *Robert Browning: A Bibliography, 1830-1950*）が出版されたのは1953年であるから、曾根氏の先駆性と熱意にはまったく敬服せざるを得ない。その内容の完成度もきわめて高いものとなっている。もう一つの注目すべき業績は、向山義彦氏のアメリカの大学に於ける学位論文 *Browning Study in Japan: A Historical Survey, With A Comprehensive Bibliography* で、これは1977年に前野書店から刊行された。この向山氏の〈日本におけるブラウニング研究史〉もまた世界に誇るべき水準で、学会・研究会における講演題までも記録してある。第二次世界大戦後52年、この間のブラウニング研究の成果の代表的なものとして以下を挙げることができよう。

- 1948年 齋藤勇「ブラウニング研究」（洋々書房）
- 1958年 加納秀夫「危機と想像」（研究社）
- 1961年 小田切米作（訳）「指輪と書物」（法政大学出版局）
- 1965年 三谷正「久遠の生命—ブラウニングの詩心」（百華苑）
- 1974年 滝山徳三「ブラウニング研究序説」（南雲堂）
- 1975年 大庭千尋（訳）「ブラウニング・男と女」（国文社）
- 1977年 大庭千尋（訳）「ブラウニング語彙」（国文社）
- 1981年 大庭千尋「ブラウニング論」（国文社）

これらはいずれも堅実な、欧米の最近の研究をも十分に咀嚼した上での翻訳であり論評である。学会情報によればわが国では毎年10件から20件程度のブラウニング関連の研究発表がなされている。理系分野のリポートは内容によっては

発表の都度ある程度の反響を呼ぶことがあるが、文系の紀要論文のみでは研究の価値が正しく評価されにくいというらみがある。研究成果をまとめてその時点での書きおろし論文とともに単行本として同学の士に問うことがブラウニング研究者の間で活発になることを願ってやまない。

おわりに

「明六雑誌」によってロバート・ブラウニングの名前がわが国で初めて活字として紹介され（明治8年〔1875年〕）てから今日まで、ブラウニングはさまざまな面において有意的に受容されてきた。Ⅰにおいてみたように、1910～20年代にあっては、植村正久、齋藤勇らが「福音新報」や「宗教と文芸」などの雑誌を通して、また、畔上賢造は「宗教詩人ブラウニング」および「ブラウニングの信仰詩」などの単行本によって、ブラウニングを宗教詩人として紹介した。キリスト教が当時のわが国民にとって新鮮であったことに加えてブラウニングの宗教詩は彼が生きたビクトリア時代一般の信仰を超えて自由で大胆な神の愛一神と人間との関係一が説かれていたことも、日本の教会人や知識人に広く受容された理由の一つであった。この時期、植村、齋藤、畔上らの文筆に啓発された全国各地の教職者（キリスト教牧師）たちが聖日の説教の中でしばしばブラウニングの詩句を引用紹介したことは容易に推察できる。

〈人生詩人としてのブラウニング〉の受容は厨川白村の信念と情熱あふれる著作によって頂点に達したといつてよいであろう。奇しくもその「近代文學十講」の発刊は大正元年（1912年）であり、「近代の戀愛観」は大正11年（1922年）に発行された。哲学者帆足理一郎が「人生詩人ブラウニング」を世に出したのは大正7年（1918年）のことである。これらの著作を介してブラウニングはわが国のいわゆる文化人一般に広く理解されるところとなった。Ⅱの章で見たようにとくに厨川一石田論争は当時の知識人（婦人層を含む）の間でそれぞ

れの側に賛成者と反対者があって熱っぽい論議を巻き起こした。当時のわが国の国家体制や社会事情を考えれば石田氏は何と言っても古いけれども一応穏健な論を展開していて同情できる点がないわけではない。この論争がいわゆる大正デモクラシーを土台とした大正デモクラシーの進展に寄与したことも看過してはならない。福原氏の「われとともに老いよ——ブラウニング随想」が昭和51年（1976年）に出版されたことは、ともすれば、ブラウニングはもう古い、時代遅れだという風潮がある現代に、〈どっこい、人生詩人ブラウニングはまだ生きていますよ、彼の詩には真理性と普遍性があるのですよ。〉と氏が私たちに語りかけていくくださるような気がして筆者にとっては喜ばしいことである。

Ⅲにおいて論じたように文芸面では明治末期（明治38年〔1905年〕）出版の「海潮音」、大正初期（大正5年〔1916年〕）のラフカディオ・ハーン：*Appreciations of Poetry*に触発されて書かれた薄田泣菫や芥川龍之介の作品群に強い影響を見ることができる。それ以後はブラウニングからの直接の影響としての作品を挙げる事はできないが、実はブラウニングの詩的表現の手法をもっとも巧みに自己の詩の創作に用いたのはT.S.Eliotである²⁷ので、エリオットに詩の表現法の多くを学んだわが国の現代詩人たちは、ブラウニングの孫弟子と言ってもよい。しかし、このことに気づいている人はあまりない。

ブラウニング研究の発展の推移は、大正の後半から昭和のいわゆる戦前期を準備の期間とし、戦後1950年～1981年に本格的な業績が続々と発表された。しかし最近の十数年は些か下火になっているとして迎えることができよう。

二十世紀後半の、心理学、言語学、文学批評等の分野における実験・理論および関連のハイテク機器の発達には目を見はるものがある。言語芸術に於ける真・善・美に絶対価値があるのかないのか。価値多元化の時代に、詩を愛し詩を研究する者はどのような姿勢で目の前の対象（詩）に向かうべきであろうか。

二つのことが重要ではないかと私には思われる。その一つは、ハイテク機器

を大いに利用することである。パーソナルコンピュータがコンコーダンスの十倍、百倍の機能を発揮し、今までは見えなかったことを見せるようになり、今までは届かなかった知の地平に私たちを誘うようになることは確実である。作品の分析、集計、総合、統計化、図形化等にハイテク機器が発揮する能力は強大である。現代の機器が利用できることは研究者の外的基礎条件の一つであるとも言える。

もう一つのことは、ハイテク機器を十分に使いこなすだけのセンス、ひらめきと問題の把握力乃至統合力を磨き上げることである。この能力は個人の誕生以後の教育と環境とも無関係ではなく大変困難な課題であるが、いやしくも研究者であろうとする者はソフトのなかのソフトであるこの能力を高める努力を惜しんではいられない。機器の機能が高まれば高まるほど人間の側のソフトの能力も鋭く磨き上げられたものでなければ良い成果を得ることは期待できなくなるであろう。

以上、文明の利器のすさまじい発達に強い衝撃を受けつつある者として筆者自身への励ましの意味を込めて本論の結びの言葉とする次第である。(1997年9月10日)

注

1. 笹淵友一「浪漫主義の誕生」(明治書院 1958年) pp.337-38.
2. 植村正久〈詩人ブラウニング〉「植村正久全集第七巻」(植村全集刊行会 1980年) pp.96,97.
3. 同上 pp.93-95.
4. 齋藤勇「ブラウニング研究」(洋々書房 1948年) p.8.
5. *Sordelo* の序文の言葉。〈われは心霊発展における事相に重きをおけり、他豈討究にあたいせんや。少なくともわれは常にしか思ひぬ。〉(厨川白村訳)

6. 「福音新報」Vol.4, No.199. Vol.5, No.7.
7. 帆足理一郎「人生詩人ブラウニング」(1918年) p.14.
8. 齋藤勇 前出 p.8.
9. 厨川白村「近代の戀愛観」(改造社 1922年)
10. 厨川白村「近代の戀愛観」(「厨川白村全集第五巻」改造社 1929年)
pp.10,11.
11. 同上 pp.67,68.
12. 同上 pp.190-92.
13. 同上 pp.158,159.
14. 同上 pp.159.
15. 厨川白村「近代の戀愛観」(角川書店 1952年) p.179.
16. 渡辺澄子「近代の恋愛観」(「明治・大正の名著総解説」〔自由国民社
1980年〕) pp.183,184.
17. 福原麟太郎「われとともに老いよ——ブラウニング随想」(新潮社
1956年) p.121.
18. 吉田精一他「近代詩鑑賞事典」(東京堂 1969年) p.221.
19. 佐藤・富田「日本近代文学と西洋」(駿河台出版社 1984年) p.60.
20. 芥川龍之介「芥川龍之介全集第十巻」(岩波書店 1978年) p.103.
21. 同上 p.472.
22. 芥川龍之介「芥川龍之介全集第十一巻」(岩波書店 1978年) p.461.
1926年(大正15年)5月30日付 木村毅宛。
23. 安田保雄「比較文学論考」(学友社 1969年) p.254.
24. 島田謹二「芥川龍之介と英文学」(「日本文学と英文学」〔教育出版セン
ター 1973年〕) pp.53,54.
25. 柴田多賀治「芥川とブラウニング」(「芥川龍之介と英文学」〔八潮出版社
1993年〕) pp.139-205. 島田謹二 前出 pp.51-74.

26. 福原麟太郎 前出 p.121.

27. “Browning, more than Yeats or Stevens, more than his disciple Pound or his secret student Eliot, is the last of the old High line, ……” (Harold Bloom. (Introduction: Reading Browning), *Robert Browning* [Prentice-Hall, Inc., 1979]), p. 12.

下線は筆者による。

本稿においては元号と西暦年号を文脈の中の効果への配慮から、筆者の判断に基づいて適宜使い分け、また併用をした。

本稿は1996年10月23日、聖学院大学・女子聖学院短期大学の〈キリスト教と諸学の会〉において発表したものを基本として修正・加筆・完成したものである。
(女子聖学院短期大学学長)